

農 大

だより

令和7年1月31日発行
愛知県立農業大学校

令和6（2024）年度版



〒444-0802 岡崎市美合町字並松1-2
Tel: 0564-51-1601 Fax: 0564-51-4831
E-mail: noudai@pref.aichi.lg.jp
ホームページ: <https://www.pref.aichi.jp/soshiki/noudai/>



CONTENTS

- 1 専攻紹介 露地野菜
- 2 特集 卒論発表会
- 3 専攻トピックス
- 4 トピックス

職場研修（鳥インフルエンザ発生時の防疫演習）を実施、
始業式を開催、
東海近畿ブロック農大生研究・意見発表会に参加、
農業者育成支援研修が修了、
農福連携支援研修が修了、
第4回進路セミナーを開催

愛知県立農業大学校
公式HP



Instagram



X (旧 Twitter)



専攻紹介

露地野菜専攻

露地野菜専攻は、愛知県が日本一の生産を誇るキャベツなどの露地野菜栽培とイチゴの促成栽培を行っています。農業の未来を担う学生27人（2年生14人、1年生13人）がメンバーです。

ほ場の広さは1.5haと広大で、季節に応じて様々な品目を栽培しています。その数は40品目にもなり農大での専攻実習を通してこれらの栽培方法を学ぶことができます。

大きな面積の栽培に適した機械化やイチゴの栽培では環境制御技術の導入も行っています。また、多品目の栽培方法など日々多くのことを学びながら、売り方やブランド化など販売方法の工夫も学んでいます。

専攻実習の様子



機械化



大きなトラクターを使った耕運、乗用の農薬散布機での防除など様々な機械を使うことができ、昨年度からはGPSトラクターも導入されスマート農業も学べます。



【機械の種類】

乗用農薬散布機、トラクター（70馬力）、ジャガイモ掘機、巻取り式動力噴霧器、プランソイラー、マルチ張り機など



販売促進



珍しい野菜の栽培も行っているため、お客さんが買いたくなるようなポップを作成し販売促進を図っています。

【ブランド化】

大玉イチゴ専用パッケージを作り高付加価値化



イチゴの設備



農大のイチゴはとても甘く好評です。炭酸ガス発生装置やモニタリング機器など環境制御を学べる設備が整っています。

【農大イチゴ栽培について】

- ・完熟出荷で糖度が高く甘い
- ・炭酸ガスを施用し光合成を促進
- ・愛知県で栽培される3品種＋他1品種を学ぶことができる



イチゴの給液管理



モニタリングデータをチェック



多様な品目



栽培品目は40品目以上。自分の育てたい野菜をこだわって作っています。

【栽培品目】

キャベツ、ブロッコリー、イチゴ、スイートコーン、カリフラワー、ナス、キュウリ、オクラ、ズッキーニ、スイカ、メロン、アスパラガス、パレISHO、タマネギ、ホウレンソウ、ダイコン、コマツナ、ネギ、チンゲンサイ、レタス、ハクサイ、エダマメ、インゲン、ラッカセイ等



ブロッコリーの収穫



キャベツの収穫



イチゴの調査

特集

令和六年度卒業論文発表会



わたしたちのプロジェクト

令和6年度卒業論文発表会

令和6年度農学科卒業論文発表会が12月17日（火）に大講義室で開催されました。

農学科では、2年生全員が1人1課題以上のプロジェクト活動に取り組みます。日頃、実習の中で学生自らが感じた疑問点や改善点を課題に取り上げ、その探究・解決に向けて実施した研究の結果を卒業論文にまとめます。卒業論文発表会では、各専攻で選ばれた2年生9名が10分間の持ち時間でプレゼンテーションを行いました。

当日は、司会や時間計測など、発表会の運営を学生会1年生が担当しました。また、県内農業系高校の先生方もお招きしており、農大生の研究成果を外部に発信する良い機会となりました。

発表者は、緊張しながらも、自信に満ちた発表を行いました。質疑応答では、審査委員や学生から活発に質問が投げかけられ、時間が足りないほどでした。その都度、発表者は的確に回答していました。

審査の結果、最優秀賞1名と優秀賞2名が選出されました。最優秀賞の養豚・養鶏専攻・松井幸生さんの課題は、1月に開催された東海・近畿ブロック農業大学校研究及び意見発表会において本校代表として発表しました。



少し緊張気味の中、堂々と発表された皆さん



審査委員や会場の学生から活発な質問



表彰式

専攻別の発表者及び発表課題名（当日の発表順）

各専攻の 発表者 (当日発表順)	発表者（専攻）		発表課題
	吉田 明実果	（鉢物・緑花木）	一度使った土は栽培に利用できるのか？
	長谷川 実穂	（養豚・養鶏）	点灯管理による産卵成績のコントロール
	安藤 杏姫	（果樹）	ブドウ「シャインマスカット」における早期ジベリン処理による果実品質への影響
	田中 快	（施設野菜）	促成ナス栽培における炭酸ガス施用の有無と仕立て本数が生育や収量に及ぼす影響
	朝倉 悠介	（露地野菜）	2品種の春穫りブロッコリーの地床育苗とセルトレイ育苗での生育違い
	松本 侑馬	（酪農）	敷料が乳牛行動と牛床の快適性に及ぼす影響
	松井 幸生	（養豚・養鶏）	黒麹給与が肥育豚の発育と肉質に与える影響
	谷川 大河	（作物）	水稻品種「ミルキークイーン」と「あいちのかおりSBL」の可変施肥における生育状況の検討
	石川 稜	（切花）	露地小ギクの高温対策による高品質化

審査講評

審査委員長 校長 恒川 靖弘

各専攻代表9名の発表は、どれも内容のある良い発表でした。テーマの設定が適切で、調査研究も工夫して実施され、結果の取りまとめや考察もよくできていました。

最優秀賞の松井さん（養豚・養鶏専攻）は、現場で深刻な問題となっている飼料価格高騰に対応したテーマについて、豚の発育や肉質だけでなく、飼料費の経済性や黒麹の体内での作用機能にも言及した点が高く評価されました。優秀賞の松本さん（酪農専攻）は、生乳生産ばかりでなく畜産分野で配慮が必要となるアニマルウェルフェアにも注目した着眼点が、石川さん（切花専攻）は、現場で深刻さを増している高温対策に関するテーマについて独自の視点で栽培改善に取り組んだ点が評価されました。他の発表もそれぞれに創意工夫がみられ、入賞した発表と比較しても甲乙付けがたい内容でした。

農業に関する調査研究は、気象条件や動植物の個体差など、データに影響を及ぼす要因が多くありますが、試験結果が思うようにならなくても、それが次に生かされれば、立派な成果と言えます。大事なことは、科学的に物を見る目、論理的に分析する能力を養うことです。

皆さんが社会に出ると、経験したことがないような問題に直面することがあると思います。そんな時こそ、この卒論研究で培った科学的な視点、論理的な分析、プレゼンテーション能力を役立てていただくとを期待します。

最優秀賞 松井 幸生（養豚・養鶏専攻）

課題名「黒麹給与が肥育豚の発育と肉質に与える影響」

○課題設定の理由

養豚の生産費の中で飼料費は約6割を占めており、飼料価格の高騰は直接的に大きな影響があり、飼料費の低減は急務である。飼料費低減方策として、古くから清酒、味噌、醤油、鰹節などの発酵製造に利用されている麹に着目し、麹による飼料効率向上による飼料費低減や発育向上、肉質改善を目的に肥育豚への黒麹給与が発育と肉質に与える影響について調査した。

○実施方法

肥育豚 LWD 種36頭に対して、試験区は慣行飼料に黒麹 0.5%を混合したものを、対照区は慣行飼料を、それぞれ不断給与した。体重(発育)・飼料要求率(飼料効率)、枝肉状況・経済性・肉質・ふん中乳酸菌数を調査した。

○結果及び考察

期間内の飼料要求率(体重1kg増加させるために必要な飼料量)は、対照区の方が高くなった。試験期間内の1頭あたりの平均飼料費は、試験区の方が114円低くなった。

肉質は対照区と比較して試験区のドリップ量は少なくなった。ふん中の乳酸菌数は、試験区が対照区と比べて1.5倍ほど多くなった。

対照区の飼料摂取量が多く、試験区の飼料摂取量が少なくなった。これは、黒麹を飼料に混合することで、乳酸菌が腸内で増殖し、大腸菌などの悪玉菌の増殖を抑え、腸内細菌のバランスを取ることで飼料を効率よく利用できるようになり、飼料要求率が低くなり、経済性に優れた結果になったと考えられる。肉質に関しては、試験区のドリップ量が少なくなり、保水性が向上し肉質が良くなった。

以上の結果より、飼料に黒麹を添付することで飼料を効率よく利用できるようになり経済性が向上し、肉質が向上することによりブランド化への可能性が考えられた。



優秀賞 松本 侑馬（酪農専攻）

課題名「敷料が乳牛行動と牛床の快適性に及ぼす影響」

**○課題設定の理由**

乳牛の生乳生産は横臥時に最も盛んである。また、横臥できる環境の整備は、アニマルウェルフェアの観点からも重要である。そこで、敷料が乳牛行動と牛床の快適性に及ぼす影響を調査した。

○実施方法

敷料としてエスカリウ（吸湿剤）ともみ殻を敷く試験区と、エスカリウのみを敷く対照区を設定し、それぞれ乳牛6頭ずつを供試した。敷料に慣れさせるため7日間の馴致期間を設け、その後7日間の平均乳量を測定した。また、最終日である14日目に行動観察を行った（1回目）。次に、試験区と対照区の牛を入れ替えて、同じ試験を再度行った（2回目）。

○結果及び考察

1回目、2回目ともに試験区の方が横臥率が高かった。また、試験区、対照区ともに2回目は1回目と比べて横臥率が低かった。泌乳量は試験区、対照区ともに差は見られなかった。

1回目、2回目ともに、試験区の方が横臥率が高く、敷料の効果が見られた。しかし2回目の試験では、試験区でも横臥率が低かった。この要因として、2回目の試験を行った7月は猛暑日が続いており、暑熱により横臥を忌避したためだと考えられる。また、このことより本試験で泌乳量に差がでなかった可能性がある。

今回の試験では生産性に差が出なかったものの、横臥率は増加しており、アニマルウェルフェアの観点から、夏でも敷料を敷くことは必要であると考ええる。

**優秀賞 石川 稜（切花専攻）**

課題名「露地小ギクの高温対策による高品質化」

○課題設定の理由

小ギクは、高温期には成長が阻害され、花の品質や収量が著しく低下することや開花が遅延することが報告されており、本校でも問題となっている。この問題に対処するためには、高温対策に関する適切な技術や管理方法の確立が必要である。そこで、圃場の遮光及び圃場への打ち水によって気温上昇を抑制できるかや、これらの方法が花卉の発色を改善できるかについて分析した。

○実施方法

露地圃場に畝を立て、「対照区」「遮光区」「打ち水区」の3試験区を設定した。

対照区には高温対策を何もせず、慣行どおり栽培した。

遮光区には、花芽分化期から収穫終了までの間、遮光率60%の遮光ネットを地面から1m程度の高さで支柱に固定し、直射日光を防ぎながら栽培した。

打ち水区には、花芽分化期から収穫終了までの間、毎日午前8時ごろと日没前の2回、畝の左右の通路に打ち水をしながら栽培した。

それぞれの試験区で、3品種の小ギクを栽培し、栽培中の気温、平均開花日及び切花品質（切花長、調整重、花卉の発色・かすれ）を調査した。

○結果及び考察

栽培中、遮光区の気温は対照区よりも低い日が多く、圃場の遮光は気温上昇の抑制に効果があった。一方で、圃場への打ち水は気温上昇の抑制には効果が低かった。

また、どの品種でも、遮光区の平均開花日は他の試験区よりも約1週間早くなり、高温による開花遅延の抑制に成功していると考えられる。

さらに、どの品種でも、切花の発色・かすれは遮光区が良い評価となった。なお、遮光区の切花長と調整重は、対照区よりも短く、軽い傾向にあったが、販売する上で問題とならない範囲だった。

以上により、露地小ギクの高温対策による高品質化には、圃場の遮光が効果的であるといえる。



専攻トピックス

最近の各専攻で話題になったことや実習風景などをお届けします！

○専攻別学生数

（注）カッコ内は女子の内数

区分	鉢物・緑花木	切花	作物	果樹	露地野菜	施設野菜	酪農	養豚・養鶏	計
1年	6(0)	8(2)	6(1)	13(3)	13(4)	15(2)	11(5)	6(6)	78(23)
2年	6(2)	5(1)	9(2)	15(5)	14(7)	14(3)	15(6)	10(3)	88(29)
計	12(2)	13(3)	15(3)	28(8)	27(11)	29(5)	26(11)	16(9)	166(52)



鉢物・緑花木

育てた植物に手を加えてより魅力ある商品に！

鉢物・緑花木専攻では、2年生が年6回の農産加工演習を受講し、自分たちで育てた植物を寄せ植えやコケ玉に加工することで、より魅力ある商品にする方法を学びました。昨年12月に実施した農大祭の準備では、2年生から1年生に加工技術を伝えたり、1年生同士で見栄えのよい商品になるよう考えながら取り組んでいました。1年生は、「自分で加工した商品が売れていくことはうれしい」と話しており、売れない場合は何が悪かったか検討して修正するなど、来年度の加工演習に向けてよいステップになりました。



切花

カーネーション、生育順調です

カーネーションというと、母の日に贈る花なので5月が旬と思われる方もいるかもしれませんが、実際にはもっと早くから花を咲かせます。昨年の秋から少しずつ収穫が始まっており、そろそろ1回目の収穫のピークを迎えようかという頃合いです。

今年度のカーネーションは、施肥設計を1から見直したり、茎を支えるフラワーネットの目を大規模に修繕したおかげで、固くて長い、真っ直ぐな茎のカーネーションが多く収穫できています。もちろん、花も大きくて立派です。

実習販売でカーネーションを見かけた際は、ぜひお手に取って質の良さを実感してみてください。





露地、施設野菜専攻が合同で卒業論文発表会を開催

1月14日（火）に露地、施設野菜専攻合同で卒業論文発表会を開催しました。昨年までは各専攻で発表会を行っていましたが、学生の経験と知識向上を目的に初めて合同で開催しました。

各専攻でお互いに栽培したことのない作物や調査研究の考え方に触れることができ良い刺激となった様子でした。

2年生は卒論作成、発表お疲れ様でした。また、1年生にはやりきった先輩の姿を胸に次年度のプロジェクトを頑張ってもらいたいです。



ミニトマトの「プチぷよ」が人気商品に！

施設野菜専攻では昨年度に皮が口に残りにくいミニトマトの品種選定を行いました。食味調査の結果、「プチぷよ」は皮が薄くて口に残りにくいという意見が多かったため、今年度も栽培することになりました。皮が口に残りにくい以外にも、食感がさくらんぼのようにやわらかくて甘さと酸味のバランスがよいのが特徴です。

「プチぷよ」はあまりスーパーで見かけることのない品種で、農大でも生産量が多くないため、売り切れになりやすいですが、農大の直売で見かけた際にはぜひ購入してみてください！



大豆の収穫を実施

大豆の収穫作業を実施しました。大豆の収穫には汎用コンバインを使用するため、近隣のオペレータからお借りして、収穫作業の実演を行いました。普段使用しているコンバインとの違いについて説明を受けた後、実際にコンバインを操作させてもらいました。大豆は稲とは違い、地際部分にも豆ができるため、コンバインの刈刃の高さの調整に苦労していました。





卒業論文、締切迫る

果樹専攻では、年も明け剪定作業もある程度終わりが見えてきて、2年生が学校に来るのも残りわずかとなりました。剪定作業が終われば2年間お疲れさまでした…と言うわけにも行かず、卒業論文の作成が残っています。2年生になってから1年間取り組んできた課題に対し、結果はどうであれ自分なりの考えで意味を持たせてほしいです。



ジャージー種の子牛が生まれました

本校では乳用牛として、ホルスタイン種のほかジャージー種も飼養しています。ジャージー種はホルスタイン種よりも生産乳量が少ないものの、乳脂肪率が高く風味が良いのが特徴です。また、体格はホルスタイン種よりも小さく、成熟体重が約400 kg程度とホルスタイン種の2/3程度で、出生時の体重も小さく約25 kg程度です。



本校での2025年最初の分娩が1月上旬にあり、ジャージー種が出生しました。分娩予定日より2週間程度早く産まれてしまったため、出生時体重が15 kgと今まで見たことがないくらい小さい牛でした。出生直後は衰弱しており、3日間ほど自力で立つことができず心配していましたが、現在は立ち上がって元気にミルクを飲み、走り回っています。ちょっとしたトラブルもありましたが、学生がしっかりと面倒をみてくれたことで元気に育っています。



家畜伝染病発生防止対策を強化しています

今シーズンは全国で高病原性鳥インフルエンザの感染が急拡大しており、令和7年1月21日現在、14道県42事例が確認されています。愛知県内では1月以降、過去最大規模となる12事例が確認されています。そのため、養鶏専攻では本校での発生を防止するために、養鶏エリア内での消石灰や消毒薬の散布、本校敷地内への人や車両の出入り口での消石灰帯の設置、車両消毒槽や動力噴霧器による関係車両の消毒、靴底消毒を徹底するための消毒マットの設置、鶏舎や関係する建物内でのねずみ捕り及び殺鼠剤の設置など対策を強化しています。



学生及び職員一丸となって、防疫意識を高め、高病原性鳥インフルエンザの発生防止対策を継続して実施していきます。

※ 各専攻の様子は、農大のインスタグラム、X(旧ツイッター)で情報発信しています。

トピックス

職場研修(鳥インフルエンザ発生時の防疫演習)を実施しました

12月17日（火）、農大の職場研修として中央家畜保健衛生所から講師を招き、全職員を対象に鳥インフルエンザ発生時の防疫演習を実施しました。

今シーズンは令和6年10月17日に北海道で国内1例目が発生して以来、令和4年シーズンに匹敵するペースで全国各地での発生が続いており、県内の養鶏場においても1月31日時点で過去最大規模となる13事例の発生があり、防疫措置が進められています。

そのため、採卵鶏2,400羽を飼養している本校養鶏専攻では、消毒の徹底を行うなど発生防止に努めていますが、万が一本校で発生した際に円滑な防疫措置を進めるために、学生・研修生等の行動指針、本校職員の役割、作業者の動員シフト、ベースキャンプや現場詰め所などの配置・導線、防疫措置の基本的な作業の流れと留意事項、防疫服の着脱などを確認しました。



始業式を行いました

1月7日（火）に始業式を行いました。

恒川校長から、「1月以降の学校生活はあっという間に終わってしまう。2年生は、社会人になるための準備期間である卒業までの学校生活で自身を高める努力をして、新社会人生活が輝かしいものになるようにしてほしい。」

「1年生は2年生の技術を受け継ぎ、学校を中心となって活躍する時期になっている。自覚を持って日々の実習や講義に取り組んでほしい。また、進路についても目標を持って取り組んでほしい」との講話がありました。



東海近畿ブロック農大生研究・意見発表会に参加しました

1月16日（木）～17日（金）、令和6年度東海・近畿ブロック農業大学校学生研究及び意見発表会が三重県松阪市の三重県農業大学校で開催されました。この大会は、東海・近畿の2府7県の農業大学校の学生代表が、農大で取り組んだ研究の成果や、農業経営・農村環境・就農等について、日頃考えていることや思いについて発表するものです。本校からは研究発表の部に養豚・養鶏専攻2年生の松井幸生さん、意見発表の部で養豚・養鶏専攻1年生の枝村瑠里菜さんが代表として参加しました。

2人とも1年間取り組んできた研究の成果や自分の考えを緊張の中にも堂々と発表していました。また、審査員からの質問にも落ち着いて的確に答えていました。

結果は入賞には至りませんでした。他府県の農業大学校の研究発表や意見発表を聞き、大いに刺激を受けたようでした。交流会も行われ、各府県の農大の状況や農業に対する思いなど積極的に交流して親交を深め、たいへん有意義な発表会となりました。



農業者育成支援研修が修了しました

令和6年度農業者育成支援研修の閉講式を1月17日（金）に行いました。今年度の研修生は30代から70代までの11名で、昨年5月24日から9か月間に渡り、研修に取り組んできました。

最高気温38度を超える真夏の炎天下でスイカやキュウリを栽培するなど、身をもって農業の大変さを学ぶ一方、「消費者に売れる野菜を栽培する」という意気込みで、農業の楽しみも知ることができたと思います。

閉講式では研修生の一人一人が、これから目指す農業への抱負を力強く述べ、「収益を上げられる農業を目指したい」、「障害者を積極的に雇用し、社会貢献したい」、「農家として独立するため広く知識を身につけたい」、「産直会員になる予定」などの声が聞かれました。

その後、恒川校長から修了証が手渡され、ねぎらいと激励の言葉を受け、閉講式は終了しました。全員が立派な農業者になってもらえることと期待しています。



農福連携支援研修が修了しました

1月17日（金）、令和6年度農福連携支援研修の閉講式を開催し、12名が9か月間の研修を修了しました。

研修生は、福祉事業所などで忙しい業務をこなしながらも、概ね週1回、暑さ寒さの中でのほ場実習や座学での講義を通じて、野菜の栽培管理や基礎知識の習得に向けて熱心に取り組みました。

また、修了にあたり、研修受講後の抱負・決意について一人ずつ発表を行いました。研修生からは、「農業と福祉の両方の知識を深め、よりよい農福連携を目指したい」、「学んだことを業務に少しずつ役立てていきたい」、「福祉サイドと農業サイドの考え方の違いを理解し、お互いが歩み寄れるような関係を築きたい」などの声が聞かれました。

研修生の皆さんには、それぞれの職場で施設利用者さんが生き生きと農作業に取り組めるよう、研修で学んだ知識や技術を活用し、活躍されることを期待します。



第4回進路セミナーを開催 ～社会人としてのマナーを学ぶ～

1月17日（金）、1年生を対象とした第4回進路セミナーを開催しました。

チエルコミュニケーションブリッジ(株)の菊田隆之先生を講師に迎え、「社会人としての基礎的なマナーを身につけるために」と題してご講義いただきました。

学生は就職活動等に相応しい服装としてスーツを着用し、まず、社会人として必要な身だしなみ、言葉使い、職場での呼称、応接室・タクシーでの席次などについて説明を受け、声に出しての練習、お辞儀の練習等も行いました。

次に、面接における身のこなし（ノックの仕方、座り方、姿勢、あいさつなど）についても、リズムやスムーズさも含めて、きめ細かく説明を受けました。

その後、指名された学生が前に出て、座り方や名刺交換について実技指導を受ける中、その様子を見て手元の資料にメモを取る学生の姿が見られました。

間もなく始まる就職活動において、学生には今回のセミナーで身につけたことを生かして、それぞれの希望進路にチャレンジしていただきたいと思います。

